

らる。翁は平素端嚴、溫讓、然も稜々たる俠骨を有せり。翁又川上冬崖に就きて洋畫を學び、曾て英照皇太后の御肖像を描き奉りし事あり。花鳥山水何れも其技精妙に達せるが、殊に孔雀は得意とせし所なり。嗣子十畝氏能く翁の衣鉢を傳へて令名あり。門下又池上秀畝、廣瀬東畝等、幾多の逸足を輩出せり。

⑤ 襟章制定

これについては「至明治四十四年一月 教務内規、諸規定書類教務掛」に次のように記録されている。

生徒制服へ襟章附著ノ件揭示案何

生徒一般

自今本校各分科生徒ノ識別ヲ容易ナラシムル爲生徒制服上衣ノ左

記

(採用シタルモノ)



各科襟章

(揭示案添付文書より。)

襟端ニ別記文字ノ襟章ヲ附著スヘシ

但シ本襟章ノ販賣ハ本校出入商人静一堂ニ之ヲ許可セリ

大正四年九月 日 本校

右文書欄外に「九月十一日学年始ヨリ実施」という記入と羽田

(禎之進)の捺印がある。

⑥ 矢代幸雄の起用

岩村透の辞職(正式な辞職は大正五年四月七日休職満期の時点である。)に伴い、正木直彦校長は大正四年九月十日付で矢代幸雄を囑託として起用した。矢代は明治二十三年生まれで大正四年七月に東京帝国大学文科大英文学科を卒業し、大学院に入学したばかりの青年であった。正木は『回顧七十年』(昭和十二年。学校美術協会出版部)の中で矢代の起用について、

大正の初め、美術學校で英語の教師を求めて居つた時、一高校長の瀬戸虎記君から、

『丁度、今年帝大英文科を出たので、矢代幸雄といふのがある。これは銀時計組で、かなりの俊才であるから、必ず役に立つだろうと思ふ。一つ使つて見て貰ひたい。』

と云つて來た。本人に會つて話して見ると、

『私は大學へ行つて居り乍ら、太平洋畫會へ行つて繪を習つたり、又彫刻もやつたりしてゐました。専門は英文學ですが、行く／＼は美術史家と云ふものになりたいて考へです。だから、美術學校へ英語で使つて貰へたら便宜が多くて結構だと思ひます。』

との事であつた。そこで、英語を受持たせて見ると、學生の間で大變評判がいゝ。と云ふのは、英語の教科書を美術書を使つてやつたのであつて、これは英語をやると同時に美術の方の知識も得られる。更に、自分は英文學の専攻であつただけに、美術家として心得て置いたがよい、と思ふやうな文學に就いての知識もそれと一緒にボツ／＼織込んで行く、と云ふ風であつた。だから二重に爲になり、興味も持たれて、美術學生など大抵は語學を好まぬのに拘らず、英語の時間といふものは歓迎されるやうになつた。これを見て、私は、よい人を得た、と悦んで居つた。

と述べている。ただし、矢代は英語（一週八時）のみでなく西洋美術史（同二時）、西洋彫刻史（同三時）も担当した。

岩村辭職後の処置が注目を集めていた中で、この若き大学院生の起用は大きなニュースとなつた。『万朝報』（大正四年十二月十四日）は次のように報じている。



矢代 幸雄

○畫家でない畫家

△美術學校に聘され

た矢代氏

九月から東京美術學校に聘されて英語と美術史に教鞭を執つてゐる矢代幸雄氏（二十）ハ、今夏東京

帝大の文科を優等で卒業し、恩賜の銀時計を拜受した一人で、今ハ大學院に在學中である、氏ハ横濱市^{住吉町三丁目}海產物輸出入商矢代宗勝氏（六十）の一人息子、母ハお美佐（五十）といふ、初め横濱商業學校へ入學したが、商業にハ趣味を有たず、將來法律で身を立てやうと決心し、中學、第一高等學校と順路を経て大正元年帝大法科に入學した、ところが、父宗勝氏ハ法律が大嫌ひ、廢せ、廢せというて肯かない爲、六ヶ月後英文科に轉學したのである、頭腦明晰、在學中ハいつも特待生であつた、そして性來繪を描く事を好み、隨つて繪畫に趣味を持つ所から大概の繪畫展覽會ハ參觀し、批評を試みてハ備忘録に手記し置き、各大家の批評と比較して楽しんでゐた、氏ハ眞の美術の批評をせんとするにハ繪畫を習得し畫家として立つても恥しからぬ技術がなくてハならぬといふので、大學に入つてから夜丈け小石川の日本水彩畫會研究所に通ひ、第七回の文展へ『草原に赤い傘』と題する水彩畫を出品して入選した、それハ大倉組の店員が買求めて今に愛藏してゐる、この夏上田文科學長、瀬戸第一高等學校長、正木美術學校長その他文展審査委員二三名が偶と會つた席上『大學生中に、畫も描いたり、美術史を研究したりしてゐる男がある』と云ふ談しから正木校長が氣に入つて了つて卒業後美術學校へ聘したのである、矢代氏ハ往訪の記者に『これまでハ只好きで描いたり、批評したりしたのだが、美術學校講師の末席を汚す以上ハ正式に美術を研究せねばならず、西洋美術史研究として大學院に入つた次第です』と語つた、正木校長ハ『繪も描く、語學も達者、美術史にも博く通じて、而も氣持のいゝ面白い人物ハ少なからう』と賞めてゐた